

<安住の灯 震災列島に生きる> 第10部 帰心を叶える (上) 息子の面 影囲む新居

8年間の仮住まいに終止符を打ち、念願の新居を構えた。明るい日差しが注ぐ吹き抜けのリビング。息子の遺影が飾られた金仏壇を居間の中心に据え付けた。

東日本大震災の津波で石巻市長面地区の自宅が流失した大工の三條経三郎さん(68)、妻のパート従業員すみゑさん(60)は今年3月、防災集団移転先として造成された同市の二子団地に自宅を再建した。

今月17日、すみゑさんのパート仲間10人が新築祝いに集まった。一人一人が仏壇に線香を上げ、静かに手を合わせてくれた。

「普通は人目に付くのを嫌って隠すけど、ヤスと一緒にいたくて」。すみゑさんは長面で津波に巻き込まれ、亡くなった三男泰寛さん=当時(17)=の写真を手に、思いを吐露した。

「泰寛、髪染めてたか?」。震災後、行方不明になった息子を検索する経三郎さんから連絡があったのは、2011年3月13日だった。

高校を卒業し、宮城県内の電子部品メーカーに就職が決まっていた泰寛さん。すみゑさんは震災前日、自宅で照れくさそうに髪を染める姿を覚えていた。「それなら本人だ。見つかったぞ」。経三郎さんから悲しい知らせを伝えられた。

泰寛さんは3人兄弟の末っ子。一つしかない子ども部屋で、兄と仲良く過ごした。自宅裏にある工務店の暖炉で、魚介類や肉を焼いて食べるのが家族だんらんの恒例行事。小さなご飯茶わんを手にした姿が今も目に浮かぶ。津波で思い出が詰まった住まいも失った。

一家は11年5月、東松島市内に借家を見つけ、みなし仮設住宅として入居した。築100年の古家は立て付けが悪く、隙間風に悩まされた。息子を亡くした失意を抱えながら、知り合いからは「自宅を直してくれ」と依頼が相次いだ。

108人が犠牲になった長面は12年の暮れ、住宅を建てられない災害危険区域に指定された。13年、約15キロ内陸に入った二子が移転先に決まった。なじみの客を差し置き、大工が先に家を再建しては面目が立たない。経三郎さんは常々、「うちが家を建てるのは最後だ」と口にしてきた。

集団移転が落ち着き始めた昨年7月、ようやく自宅の上棟式を迎えた。仕事の合間を縫って作業し、完成まで8カ月かかった。「長かった。ヤスもようやく落ち着ける」。すみゑさんの心がようやく晴れた。

「仕事をして結婚して家族をつくり、いずれ家を建てたい」。泰寛さんは高校生の時、10年後の自分を作文につづっていた。身の回りのものは全て流された。数少ない遺品として、学校から受け取った。

「何でだよ。まだ早かったのによ」。居間で晩酌しながら遺影に話し掛ける経三郎さん、傍らで見守るすみゑさん。2人は今も面影を探し続ける。

再建した自宅で暮らし始めてから3カ月。すみゑさんは朝早く、新しい仏壇にご飯とお茶を供えるのが日課になった。「今日も何事もなく過ごせますように」。わが家で過ごす静かなひとときをかみしめる。



1枚目/2枚中

新築祝いに集まったパート仲間料理を勤めるすみゑさん(右から3人目)。居間の中央にある仏壇には、泰寛さんの遺影が飾られている=宮城県石巻市二子3丁目

